

○別府大短大 江後迪子 共立大 吉川誠次

- 目的 江戸時代は封建制度の特長として、地域の食文化が形成されたのであるが、同時に中央幕府からの干渉も強力であった。今回豊ノ国大野柿ヶ原村の「御菓子品々値段帳」寛保元年 1736 の記録の内容について検討し、菓子値段帳の物語る地域食文化の様相について考察を加える。
- 方法 近世の菓子の名称とその製法についてかなりのデータの蓄積があるが、これらは上方江戸を中心にして菓子屋が献上を目的にして作成されたものが多い。ここでは資料に記載された約 2/4 種について、既往の文献にあたってその製法と分類について確定した。又この種の値段帳が全国的に形成された形跡があり、牧野氏によって出羽鶴岡の「酒井様御菓子値段帳」安永 7 年 1778 の翻刻を入手したので、両者に共通する菓子について価格の相関についても考察を加えた。
- 結果 菓子は砂糖の輸入に伴って元禄時代以降飛躍的に増加した。菓子の分類はその名称と製造法の変遷などの混乱があり、正確を期することは困難であるが日本商品分類に基づいて分類した結果、もち菓子が約 3 分の 1、蒸し菓子、干菓子、練菓子が 8 ~ 10%、その他南蛮菓子が 5% であった。出羽鶴岡の値段との比較では年代にして約 40 年の差があるものの、共通する名称の 5 種類の菓子の値段は相関係数にして 0.78 の高さを示し、菓子類の商品学的情報量の交換も多かったと考えられ、酒類とともに諸藩の財政源として菓子が格別に重視されていたことを物語るものである。